

## 地域研究統合情報センター

ニューズレター No.7

2010年9月

- 1 センター長就任にあたって  
「五年目の地域研へ」
- 2 2010年度 CIAS 共同利用・共同研究  
「四つのプロジェクトを柱に研究を推進」
- 5 インタビュー・研究室探訪4  
「文書資料と非文字資料の解釈学—歴史から地域を考える」
- 8 研究会・シンポジウム開催報告
- 11 研究会開催のお知らせ/地域研究コンソーシアムの活動
- 12 旅紀行「越境するカリスマ僧コークー師」
- 13 国外客員研究員/出版物の紹介



# 五年目の地域研へ

林 行夫 (地域研センター長)

2010年度も半年が過ぎる。激増する会議で息も絶え絶えの日々が続くが、スタッフのご尽力のおかげで、予算や概算要求の財政措置に翻弄されつつも地域情報学プロジェクトがたちあがり、昨年度末に実施した外部評価委員会の結果をまとめた。そうした作業を通して改めて地域研を外からみ、考えることになる。

地域研の過去四年間は、組織の骨組と活動の仕組を整える時間だった。初めの二年間は「全国共同利用施設(試行)」、続く二年間は「全国共同利用施設」、今年度から「共同利用・共同研究拠点」である。毎年のようにその対応に追われ、膨大な時間と労力が費やされた。

同時に、国内の地域研究関連機関との共同・協力、研究分野と地域を横断する共同研究を促進し、情報学の手法を地域研究に応用した地域にかんする情報の共有化を進めてきた。公募による学際的共同研究のシステムを整え、データベースの構築と公開、共有化システムの試行と公開に尽力してきた。外部評価でも言及されたことだが、限られた人的資源と財政的措置にもかかわらず、短期間で全国の地域研究推進拠点としてミッションに沿った地域研究の推進体制を整えたのだ。改めて前センター長の偉業を痛感する。

振り返れば、過去の四年間は相関型地域研究と地域情報学を活動の両輪として基礎づける期間だった。

これから、である。

厳しさを増す財政状況にあって「共同利用・共同研究拠点」として効率的かつ実質的な活動をどう展開させていくか。

設立以来吉田キャンパスと川端地区に分かれていたスタッフは、平成20年末から現在の稲盛財団記念館に集い初めて一つどころで活動しはじめた。地域と同じく、いかなる組織も人という細胞の相互作用が楽んでいる。一種の化学変化がおこる。地域研独自の成果を開花させなければならない。そんな気運のなか、5年計画の「地域情報学プロジェクト」が発足した。これは、相関型地域研究と情報学を両輪とする研究を統合的にモデル化しようとするものだ。

制度が地域研究者を促成栽培する時代である。しかし地域研究という営みは、ある地域を生き、さまざまな立場で地域と関わる人びととの相互作用であることに変わりはない。経験を通して研究者に刻まれていく身体知と、外部から届く情報知が複雑に絡み合う場である。そのことを足場として、人とともにある地域研究を推進し発信する機関でありたい。培われた礎の上に共同研究の充実、地域情報学プロジェクト、地域研究方法論や地域研究コンソーシアム活動などの一層の振興を通じて、その責務を果たしていければと願う。



# 四つのプロジェクトを柱に研究を推進

## 相関型地域研究「〈地域〉を測量る—21世紀の『地域』像」がスタート

地域研では、共同研究として「相関地域研究プロジェクト」、「地域情報学プロジェクト」、「地域研究方法論プロジェクト」、「地域情報資源共有化プロジェクト」の四つを柱とし、それぞれのプロジェクトのもとに複合研究ユニットと個別研究ユニットを配し、研究対象の地域や専門分野を超えた共同研究を推進しています。

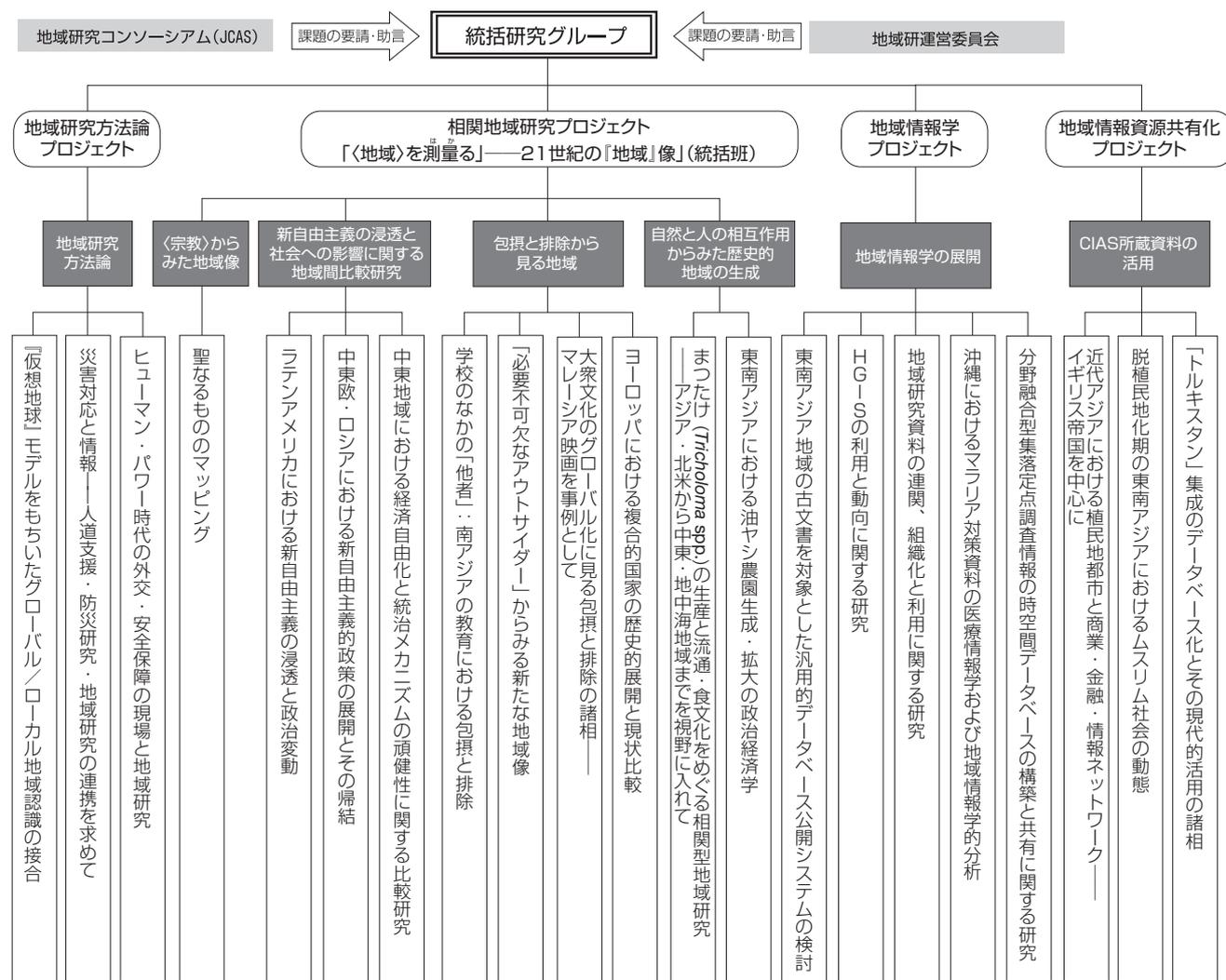
相関地域研究プロジェクトでは、ヨーロッパと東南アジア、ラテンアメリカと中東などのようにテーマごとに地域を超えた比較研究を企画したり、文理の枠を超えた連携による研究を試みたりしています。今年度からは新たに

「〈地域〉を測量る—21世紀の『地域』像」が始まりました。

地域情報学プロジェクト「地域情報学の展開」では、地域研で作成・公開している地域研究に関わる複数のデータベースをより効果的に作成・公開する方策を探り、地域情報資源共有化プロジェクト「CIAS所蔵資料の活用」では、英国議会資料(BPP)をはじめとする地域研のさまざまな地域情報資源を活用した研究を推進します。

地域研究方法論プロジェクトでは、複数の教育・研究機関をつなぐかたちで研究会を組織し、地域研究の方法に関する議論を進めています。

(文責：山本博之)



2010年度 京都大学地域研究統合情報センター 共同利用・共同研究

○……プロジェクト    ■……複合共同研究ユニット    □……個別共同研究ユニット

## 研究の概要と企図

2010年度の共同研究の概要とそのねらいを紹介します。参加メンバー等の詳細については、地域研ホームページをご覧ください。

### 地域研究方法論プロジェクト

#### ■ 地域研究方法論

##### 『仮想地球』モデルをもちいた グローバル／ローカル地域認識の接合

全地球的な各種主題図と地域の地点情報を集積し表示するシステム（『仮想地球』モデル）を用い、グローバルな認識と地域研究が対象とするローカルな認識とを接合させ、地域研究の新たな展開と「総合知」としての学問の復権を図る。

##### 災害対応と情報——人道支援・防災研究・ 地域研究の連携を求めて

アジアの自然災害をめぐる「現場の情報」と「研究の情報」とを結びつけ、被災コミュニティ、人道支援、防災研究、地域研究など異業種・異分野間で情報を相互に参照する方法を、インドネシアの事例に基づいて提示する。

##### ヒューマン・パワー時代の 外交・安全保障の現場と地域研究

外交と安全保障を事例として、実務者と研究者のそれぞれがもつ「情報のかたち」を明らかにし、両者を互いに「翻訳」するための方法論と協働関係を促進するための研究手法を探求する。

### 関連地域研究プロジェクト 「〈地域〉を測量する」——21世紀の『地域』像

#### ■ 〈宗教〉からみた地域像

##### 聖なるもののマッピング

宗教施設の所在、参拝者・巡礼者の移動、聖職者の移動、聖なるモノとしての経典や神像の拡散を定量的に跡づけることで、国家その他の行政的版図とは異なるかたちで人々が構想する「地域」のありかたとその動態を描き出すことをめざす。

#### ■ 新自由主義の浸透と社会への影響に関する地域間比較研究

##### 中東地域における経済自由化と 統治メカニズムの頑健性に関する比較研究

原油価格の変動などを背景として政治と経済が交錯する中東諸国の状況、およびそれが社会にもたらした影響について検討し、中東諸国家の制度的頑健性について理論的かつ個別事例の分析を進めることを課題とする。



「中東地域における経済自由化と統治メカニズムの頑健性に関する比較研究」  
第1回研究会（6月27日）

##### ラテンアメリカにおける新自由主義の浸透と政治変動

1970年代以降のラテンアメリカにおける新自由主義は、マクロ経済を安定化させた一方、所得再配分といった国家機能を強化する作用はもたなかった。本研究では、新自由主義がラテンアメリカの政治変動に与えた影響を考察する。

##### 中東欧・ロシアにおける 新自由主義的政策の展開とその帰結

中東欧および旧ソ連諸国で社会主義体制解体直後におこなわれた経済政策や社会政策のネオリベラル化、そしてその後の金融危機等を通じた揺戻しについて、その内情および過程の多様性を検討する。

#### ■ 包摂と排除から見る地域

##### 学校のなかの「他者」： 南アジアの教育における包摂と排除

南アジアにおける各種学校の卒業生たちの進路とその後、社会経済的状況の比較分析、生徒や卒業生の認識における「学校教育」の検討をおこない、教育制度のなかに形成される包摂と排除の現状と人々の戦略、および内面化のメカニズムの検討を試みる。

##### 「必要不可欠なアウトサイダー」からみる新たな地域像

国家や社会によって「必要不可欠なアウトサイダー（Essential Outsiders）」として位置づけられてきた華人とユダヤ人のありかたを、東南アジアとアメリカの事例について比較検討することにより、21世紀における新たな地域像を提起する。

## 大衆文化のグローバル化に見る包摂と排除の諸相——マレーシア映画を事例として

地域研所蔵のマレーシア映画コレクションを利用して、マレーシア国内およびそれを取り囲む外部社会との関係も踏まえた上で、映画に現れるマレーシアという地域の姿を描き出し、これを通じてマレーシア社会が経験している排除と包摂の様相を明らかにする。

## ヨーロッパにおける複合的国家的歴史の展開と現状比較

ヨーロッパ史にたびたび登場し、現在では多民族共存の処方箋として期待する向きもある複合的な国家システムを有する国(複合的國家)について、そうした国家制度が構築および修正を施される際の各国ないし各民族の選択と行動の比較をおこなう。

## 自然と人の相互作用からみた歴史的地域の生成

### まつたけの生産と流通・食文化をめぐる相関型地域研究——アジア・北米から中東・地中海地域までを視野に入れて

世界の広範な地域において生起しているマツタケをめぐる諸現象を、①生態環境とヒューマン・インパクト、②流通の政治経済、③人の移動と食文化、の各レベルで把握することにより、地域間の相互作用を動的に描き出すことを目的とする。

## 東南アジアにおける油ヤシ農園生成・拡大の政治経済学

東南アジアにおける油ヤシ農園の開発と拡大の歴史、それに伴う自然と人との関係の変容について、政治経済学を軸に据えて総合的に考察。油ヤシ以外の農園も含め、自然科学的環境評価などを導入した政策提言も視野に入れた総合的研究をめざす。

## 地域情報学プロジェクト

## 地域情報学の展開

### 東南アジア地域の古文書を対象とした汎用的データベース公開システムの検討

東南アジア諸地域の文書資料に広く対応したデータベース公開システムを、既存の文書資料データベースの枠組みを参照しながら検討する。またその議論の材料として東北タイ南部クメール語貝葉文書データベースを試作する。

## HGISの利用と動向に関する研究

時空間解析ツールを使った研究事例を蓄積するとともに、時空間解析ツールを実際の研究現場に適用することについて検討を進める。また、各研究や事業のなかで用いられている地図などの基盤的なデータの共有化を図る。



「まつたけの生産と流通・食文化をめぐる相関型地域研究」第1回研究会(8月19日)

## 地域研究資料の連関、組織化と利用に関する研究

地域研究資料の組織化と利用の方法の解明を目的とし、①地域研究資源アーカイブの組織化に関する研究、②地域研究資源アーカイブの時空間情報への対応、③オントロジーの地域研究資源アーカイブへの適用をおこなう。

## 沖縄におけるマラリア対策資料の医療情報学および地域情報学的分析

医学・衛生学関係の資料群を重要な医療情報、地域研究情報と位置づけ、従来の研究において本格的に分析されてこなかった1920年代から70年代にかけての沖縄におけるマラリア対策資料の本格的な利用方法を模索する。

## 分野融合型集落定点調査情報の時空間データベースの構築と共有に関する研究

約半世紀にわたり分野融合型の地域研究が続いている東北タイの一村の事例を取り上げ、様々な分野にまたがる異質の調査データを空間軸の下に統合し、共同研究者同士での情報の共有化を図るための方法論を構築する。

## 地域情報資源共有化プロジェクト

## CIAS所蔵資料の活用

### 脱植民地化期の東南アジアにおけるムスリム社会の動態

ジャウィ表記マレー語雑誌『カラム』記事データベース作成プロジェクトを継承。同データベースの内容・利便性を拡充する。さらに『カラム』の内容に関する研究会をおこない、同データベースを実際に活用した研究へと発展させる。



ジャウィ文献講読のための講習会(6月26日、27日)

## 近代アジアにおける植民地都市と商業・金融・情報ネットワーク——イギリス帝国を中心に

『英国議会資料』を積極的に活用し、近代アジア植民地都市を舞台として活動したイギリス系およびアジア系の商人・企業家・銀行の経済活動、そして彼らの活動の基盤をなした諸条件を総合的に探究する。

## 「トルキスタン」集成のデータベース化とその現代的活用の諸相

ロシア帝政期の中央アジアに関する資料集成『トルキスタン集成』のデータベースを、中央アジア研究者がそれぞれの関心から多角的に利用することを通じ、データベースの改良をおこなう。また、地域研究資料としての『トルキスタン集成』の位置づけを明らかにする。

# 文書資料と非文字資料の解釈学—— 歴史から地域を考える

話し手・貴志 俊彦(地域研教授) × 聞き手・山口 哲由(京都大学東南アジア研究所研究員)

地域研究が扱う領域やその方法論、あるいはそのあり方は、現在もなおホットな話題です。地域研究は、既存のディシプリンを超えるのか、それをつなぐのか。既存のディシプリンから外れたところにあるのか。

それとも、ある意味でのディシプリン化が要求されているのか——。「研究室探訪」では、地域研究をめぐる議論を豊かにすることを期待してさまざまな方にお話をうかがいます。

第4回は、今年4月に地域研に赴任した貴志俊彦教授(地域研)に東南アジア研究所の山口哲由研究員が話を聞きます。

貴志教授は、文書資料と非文字資料という二つの研究メディアから、東アジアを中核とした地域間の結びつきを考察してきました。



●きし・としひこ 広島大学文学研究科東洋史学専攻博士課程単位取得退学。島根県立大学、神奈川大学等をへて2010年から現職。近現代の東アジア地域について、地域研究と国際関係論の方法論を援用しつつ文献実証学的に研究。非文字資料研究の可能性を模索し、東アジア地域の史資料情報の共有化・発信も試みる。

## 非文字資料研究との出会い

山口●まず、貴志さんが研究を始められたきっかけに関して、お話しいただけますでしょうか？

貴志●私は、統廃合された大阪外国語大学のモンゴル語科の卒業です。学部の卒論では、清末のハルハ・モンゴルにおける牧民運動とチベット仏教との関係について書きました。しかし、このとき指導教官がモンゴル人民共和国に在外研究に行ってしまう、まともな指導を受けることができませんでした。研究で完全燃焼できたという気分にはなれなかったため、広島大学大学院に進学したわけですが、指導教官からは、モンゴル研究を断念して、中国研究にシフトするように、半ば命じられました(笑)。そこで悪戦苦闘の結果選んだ研究テーマが清末の地域政治の研究。難解な漢文と格闘しながら、皇帝への上奏文を読み込んでいった思い出があります。

山口●これまで文字資料に立脚した歴史研究をおこなわれてきたなかで、最近、『満洲国のビジュアル・メディア——ポスター・絵はがき・切手』という本を出版されましたが、そういった非文字資料の利用へと展開された経緯を教えてくださいませんか。

貴志●2004年でしたか、私は鳥取県の西伯郡南部町にある「祐生出会いの館」という小さな資料館で、ほんとうに偶然に膨大な満洲国のポスターや、伝単といわれる宣伝ビラに、まさに「遭遇」したのです。まあ、偶然から研究が始まった

わけです(笑)。世界の文書館での調査は、「鉱脈掘り」による偶然の連続ですよ。

山口●研究手法を変えるというのは、かなりの覚悟が必要だと思のですが、すぐに移行できるものですか。

貴志●私たちのように文献を重視する研究者は、出合った資料で仕事をする。根拠のないことを書くと考えられないことになるので、残された文献でしか語れないわけです。そこには、当然限界があります。ともあれ、出合った資料によって、研究トピックはどんどん変わりますし、そういう器用さがないとやっていられないですね。

山口●文字資料も非文字資料も、それほど違いはないということですか？

貴志●いや、非文字資料の取り扱いについては、そうとう悩みましたね。この悩みを抱え始めた2004年頃、東南アジア研究所の柴山守さんや当時国文研(現在地域研)におられた原正一郎さんたちとともに、Humanities-GIS研究を発足させ、定期的に京都大学に集まるようになりました。私は、この研究会を通じて、図画像データベースを作ることができたのです。同時に、歴史学者に認知されるような成果を出さなければならなかった。そして今年ようやく吉川弘文館から『満洲国のビジュアル・メディア』を刊行できました。6年間の非文字資料調査の成果が、この本に凝縮されているわけです。同時に、こうした非文字資料を使った研究の、自分なりの研究手法を確立するのに、これだけの時間は必要だったのですね。

山口●収集した資料を整理して論文を書くということと、データベースを構築することは別の作業のように思えるのですが、研究を進めていくうえでどのような意味があったのでしょうか？

貴志●私自身について言えば、非文字資料の研究とデータベースの構築は、やはり両輪の関係にあったと思っています。それまで歴史研究の対象として取り扱われてなかったら



●やまぐち・たかよし 京都大学東南アジア研究所G-COE研究員。専門は環境人類学。主な調査地域は中国・インドなどの山岳地域。

いろなメディアを交錯させながら研究するという方法論が、自分のなかでだんだん熟成されていったのです。その方法を作る一つのプロセスとして、データベースを構築することは、自分にとってはとても意味があったと思うのです。

## 「越境する存在」への関心

山口●いろいろな資料との出会いに応じて研究対象が変遷してきたとのことでしたが、先生のもっとも根源にある興味関心はどのような部分になるのでしょうか？

貴志●あえていうならば、都市を超えて「越境する存在」とは何か、そしてそれらが定置する社会とどのような関係性にあるのかということに関心をもっているといえます。よく「ヒト、モノ、カネ、情報」を言いますが、どうやらそれだけではなくて、たとえば法体系や、都市計画、あるいは文化や価値、ライフスタイルとかが越境して地域の人々に影響を与えていく。都市は、一国あるいは東アジアという特定の地域だけでは存立せず、ある意図をもって、ある特定の形で世界とつながっていることを見る格好のテーマだと思っているのです。

山口●ご著書『満洲国のビジュアル・メディア』でも取り上げられていた宣伝ポスターや絵はがきもそういった繋がりを見るための材料であるということですか。

貴志●そうですね。日本と満洲との関係が、あるいは世界と満洲と当時の中華民国との関係がどのようなかたちになっていたかということ、ポスターなどのプロパガンダ・ツールによって解き明かそうと試みたわけです。

山口●情報の移動であると同時に、ポスターや絵はがきといった実体的なモノの移動でもある？

貴志●モノの移動にともなって、なにかどう変化していくかということは、グローバル化を考えるときにも重要な問題です。実際、均一的にグローバリズムが進行するわけではなくて、ある特殊なロジックがあって、そして相互の利害関係があって、その利害に基づいて拡がっていく。グローバリズムを地域から見れば、ひじょうに強く影響を被る問題と、それほど重視する必要のない問題とがあることに気づくわけです。それに、同じ国家のなかでも、地域によってその影響力は異なる。地域研究は、地球世界を考える普遍的な問題に対して、地域という個性がいかにかかわっているかを考える、いわば世界の多重的、多層的な成り立ちを理解するうえで、きわめて重要な学問分野だと思うのです。

山口●地域間の繋がりを見る場合、数量的に把握しやすいような移民などが取り上げられてきたことに対して、非文字資料などを使っていけば、新たな視点も掘り起こせる可能性があるのでしょうか。

貴志●いずれにせよ、モノ重視の姿勢でしょうね。モノは残りたいから残るわけじゃなくて、一つの残るロジックとい

うか意味があるわけです。そのモノが残るためには、そのモノと、それに関わるヒトや利害とかいうさまざまなものが交錯していく。文書も非文字資料も、モノとしての意味を考える点では同じだというイメージにたっているわけです。

## 歴史研究と地域研究

山口●これまで歴史的な研究に携わってこられた貴志さんの立場から見て、地域研究という学問分野はどのような印象なのでしょう。

貴志●京都大学の東南アジア研究所ですっと中心的な役割を担われてきた石井米雄先生が、どうやって日本的な地域研究を作るかと考えられたときに、その根幹の学問は農業と歴史だと考えられたのです。大所高所から見る米国の地域研究とは、発想がぜんぜん違うわけですね。日本における地域研究というのは、もっと地に足のついた、より地域の内在性や伝統的なものを見つめるという姿勢が重要視されたのです。

日本の地域研究は、さまざまなディシプリンを背景にもつ人たちが集積している、柔軟性のある学問分野だと考えたほうがいいように思います。大事なことは、地域をどう見るか、あるいは地域の変化やそこで生活する住民の論理や価値をどのように理解するかということですから、フィールド派か文献派かという二者択一に縛られることなく、いいものをお互いに共有しようという思考の柔軟性が重要だと思っています。これは、今日いわれる文理協働の基本姿勢だと思います。

山口●さきほどおっしゃられたように、情報やモノの流れという視点から地域を見ていくという立場であるということですね。

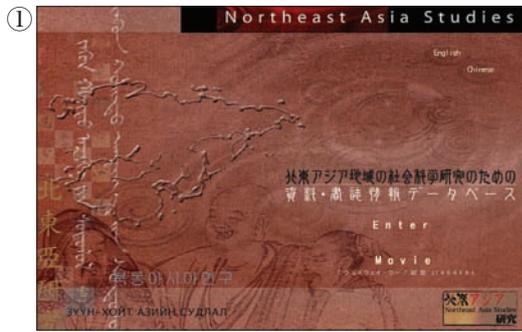
貴志●そうですね。ただおもしろいことに、これまで私がやってきた研究は、歴史学者からは地域研究だといわれ、地域研究者からは歴史研究だと見なされています(笑)。

山口●これまでおこなってこられた歴史的な個別地域の繋がりを描くという作業とともに、地域研究の方法論としてネットワーク解析みたいな方法論に関しても言及していかれる予定でしょうか。

貴志●書けるかどうかわかりませんがね(笑)。ただ、私としては、絶対的に原則としていることが一つあるんです。それは、いかなる歴史的問題でも、できるだけ現在のその場に行くことですね。そして現在がどうなっているかをしっかり理解したうえで、歴史論を書いていくこと、いわば現場と現在を重視する姿勢だけは崩していないつもりです。

山口●それは時代が違っても問題ないのですか。

貴志●当然、ときには問題が起ります。自分が明らかにしようとしている時代と、現代の情勢が、ひじょうに似通っている場合と、劇的に変わっているという場合があるわけじゃないですか。そうすると、つながればつながるで、なぜそれがつながっていくのか、あるいはまったく違う世界に



①「北東アジア地域の社会科学研究のための資料・書誌情報データベース」、②「戦前期 東アジア絵はがきデータベース」、③「満洲国とメディア：プロパガンダポスターと伝単」、④「中国における『外国人』人口統計データベース——戦前編」の検索結果の画面。①～③は（現在移築中）

変化しているとするならば、なぜそういう変化が訪れているのかを考えていく必要があるわけですね。私は、現代をしっかりと理解できないような歴史研究なんか意味がない、そういうことを大学院時代から言われてきました。

## 地域研究におけるコンピュータ利用の可能性

山口●現在の地域研では、データベースの構築や地域情報学としての研究の方向性などが議論されています。貴志さんとしては、地域研究統合情報センターという名称のもとで、どのように情報学と関わっていかれるのでしょうか。

貴志●この地域研で自分がなすべきミッションとは、東アジアだけでなく東南アジアも含めた地域を研究対象として研究を拡大させることが一つ。それと同時に、方法論としては、地域研究に情報学を取り入れた研究を具体的な作品として結実させることが課題ですね。

山口●具体的に言うって？

貴志●人間が可視化したり、認識したり、分析したり、記憶する、そういう人間の叡智は重要ですが、ときには個人の思い込みや、理解できる範囲内で地域や世界の複雑なシステムを理解しようとしているのです。人間には不可知なメタデータが世の中には存在しているのに、これまではある枠組みこそが、一種の「解」を得られる手法だと思われてきた。しかし、地域は、現在まで私たちが理解している範囲ではとらえきれない複雑系によって構成されているわけです。たとえば、食物と栄養素との関係と同じで、現在の栄養学は食物全体をけっして解き明かしていないわけです。いまの時代を生きている私たちとしては、地域の複雑な要素をコンピュータで処理することによって、これ

まで語られてこなかった、あるいは語られてきたけれども、じつは実態からかけ離れた地域像を再検討することができればと思っているのです。コンピュータによって地域の何が描かれるかという発想ではなくて、未知なる地域像を浮かび上がらせるためにコンピュータを利用する、それでいいのではないかと思います。

山口●コンピュータという媒介を通して多くの情報を集積させ、それらを整理し、さらに公開するという過程で、もっと違う地域理解のかたちが見えてくるということですか。

貴志●世の中で、まったく関係のない事象が独立して分散しているということは、私はないと思っています。あらゆるものに因果関係が存在するのだけれども、何がどうつながっているのかは、人によって解釈の仕方が異なるわけですね。仏教でいう「空」という概念を、コンピュータ利用によって地域理解に応用する。日本、東アジア、東南アジアの地域間関係を探るツールとして、コンピュータを利用したいのです。この地域の未来や展望をみる姿勢がなくなってしまうでしょうか。私は歴史学者ですが、明るい未来をどう構築するかを考えることはとても重要なことだと思っています。いかがでしょうか。

山口●フィールドワークをおこなった際に、さまざまな情報が溢れるなかで何をどう理解すればいいのか解らないときがあります。そういう場合でも、一つ一つの事象を丹念に記述して、整理していけば、やがてものごとの仕組みが見えてくることがあります。そういった作業を、コンピュータを介して多くの研究者と情報を巻き込んで進めていけば、あらたな地域研究の地平が広がってくるのかも知れません。ありがとうございました。

田中耕司先生退職記念シンポジウム

## アジアの稲作研究からアジア地域研究へ

日程：2010年4月17日(土) 会場：京都大学稲盛財団記念館3階大会議室

地域研が設立されて以来、4年間にわたってセンター長を務められた田中耕司先生が2010年3月をもって定年退職されました。退職されるにあたって、組織としての公式の退職記念事業とは別に、田中先生のアカデミックな業績を振り返り、今後の展開を考えるためのシンポジウム「アジアの稲作研究からアジア地域研究へ」を、4月17日、京都大学稲盛財団記念館で開催しました。

田中先生の研究を概観すると、日本の農業技術史に関する研究、東南アジアと周辺諸国における農学的な研究という柱に加えて、インドネシア・スラウェシ地域研究に代表されるフロンティア社会論や、ラオス・ミャンマーなどの大陸部を含めた生態資源の利用と管理など、東南アジア地域社会の動態に関する研究がもう一つの柱として見えてきます。この研究動向と対応するようにシンポでは、遅沢克也先生(愛媛大学)に「スラウェシ研究と Cinhta Laut Foundataion 構想」、Terry Rambo 先生(コンケン大学)に“The Interface between Social Science and Agricultural Science”、徳永光俊先生(大阪経済大学)に「比較農法史研究に『個体・群落』の農法の視点は有効か」(以上、発表順)と題する話題

提供をいただきました。

シンポジウムでは、田中先生の研究履歴が多岐にわたることを反映し、多様なバックグラウンドをもつ参加者が一堂に会し、新たな交流が生まれました。このことは、田中先生のお人柄を反映しているとともに、一人の地域研究者の人的財産を次世代に継承できたという点でもきわめて印象的でした。

(文責：柳澤雅之)



若い人へのメッセージを中心に講演される田中先生

## 平成21年度全国共同利用研究報告会

日程：2010年4月25日(日) 会場：京都大学稲盛財団記念館3階大会議室

4月25日、「平成21年度全国共同利用研究報告会」を京都大学稲盛財団記念館にて開催しました。地域研全国共同利用研究の研究代表者および共同研究



多様な分野にわたる全国共同研究に参加する共同研究者をはじめとして国内の56名の研究者や実務者が参加した

員が一堂に会し、研究成果の共有および今後の研究の発展に向けた検討をおこなうもので、全国共同利用施設としての研究活動を行う本センターとして3度目の試みです。

今回は、三つのプロジェクト(「関連型地域研究」、「地域情報学」、「地域研究方法論」)のもと、五つの複合研究ユニット(「リージョナリズムの歴史制度論的比較」、「『民主化』と体制転換の地域間比較研究」、「自然生態資源利用における地域コミュニティ・制度・国際社会」、「時空間情報に着目した地域研究情報の創出」、「地域研究方法論」)と、12の個別ユニットが報告を行いました。

共同利用研究も4年度目を迎え、地域研の設立当初から実施された関連型地域研究プロジェクト「21世紀の『国家』像」およびそのもとに置かれた各複合研究ユニットは研究期間の最終年度を迎えました。報告会では多くの研究成果が報告され、そのうちいくつかの知見についてさらに議論を深めるとともに、今後の共同研究の発展の方向性について活発な議論を交わしました。

(文責：山本博之)

## 移植される世界、交雑する地域—— 「21世紀の『国家』像」プロジェクト総括

日程：2010年4月24日(土) 会場：京都大学稲盛財団記念館3階大会議室

20世紀は、近代化や開発に関するヨーロッパ起源のさまざまな考え方が世界各地に移植され多くの地域社会で部分的・選択的に受容される一方、それにもとづいた国家建設や社会発展が、地域固有の事情のため、地域ごとに大きな多様性を示した時代でした。20世紀末にはグローバル化の名のもとに「世界のヨーロッパ化」の試みがさらに加速されたと考えられます。

本センター最初の関連地域研究プロジェクト「21世紀の『国家』像」では、そうした世界の規範と地元の論理との交雑のプロセスを、ヨーロッパ、東南アジア、ラテンアメリカにおける事例研究および比較研究を通じ、21世紀の世界において問われるであろう、普遍主義と個別主義の二項対立を乗り越えた「国家」のあり方を考察しました。

ワークショップでは、前記プロジェクトを構成した三つの複合同共同研究の代表者が、ヨーロッパにおける移動

を事例に、「国民国家」を超える位相でみられる「国家」(小森宏美)、自然生態資源の利用を例に、排他性を主張する「国家」(柳澤雅之)、ラテンアメリカでの国家形成の変遷を例に、グローバル化を背景にした「国民」形成の動きに現れる「国家」(村上勇介)について報告しました。

コメンテーターからは、中東のイラクなどの例を中心に、サブナショナルなアイデンティティが強化されるなかで一国の領域が変更されていないでいる状況(東京外国語大学・酒井啓子)、ならびにアフリカのソマリアやコンゴなどの破綻国家・迫害国家の現状(京都女子大学・戸田真紀子)が披露された後、フロアも含め、「国家」をめぐる比較研究の妥当性や方向性について議論が展開しました。その内容を踏まえ、今後は、世界の各地域の比較研究から「国家」を考察する帰納的な国家論を本格的に展開する機会を探ってゆきたいと考えています。

(文責：村上勇介)

## 地域研萌芽研究成果報告会

日程：2010年6月24日(木)、7月1日(木)、8日(木) 会場：京都大学稲盛財団記念館セミナー室

6月24日、7月1日、8日の3日間にわたり、京都大学稲盛財団記念館にて「平成21年度地域研萌芽研究報告会」が開催されました。地域研萌芽研究は今年度以降の全国共同利用研究の方向性を探る目的で昨年度に設置された単年度の枠組みで、複合・個別の共同研究等への発展を視野に入れた研究が行われました。

「アジアにおける越境空間と地域性のダイナミクス」、「情報・帝国・都市——英帝国とアジア植民地都市」、「教育の時代」——変動する社会のなかの教育と子ども、「グローバル経済下における生産、生存、環境」、「定量データ分析と数値解析に基づく地域研究手法の発展」など、12件の萌芽研究の研究代表者および地

域研の教員・研究員が集まり、研究成果の共有および今後の研究の発展に向けた検討を行いました。

研究期間を終えた萌芽研究はそれぞれの展開を見せています。萌芽研究を継承した研究組織が地域情報資源共有化プロジェクトのもとで今年度の個別研究ユニットに採択された例のように、地域研の共同研究の一部となって展開しているものもあります。

(文責：山本博之)



萌芽研究の共同研究員を含む30名が参加し、12件の萌芽的な研究について研究成果報告と今後の発展に向けた検討を行った

## 日本ラテンアメリカ学会記念講演

日程：2010年6月5日(土) 会場：京大会館

6月5日(土)、6日(日)の両日、京都大学の京大会館を会場に、日本ラテンアメリカ学会第31回定期大会が開催されました。同学会の定期大会が京都大学で開催されたのは初めてです。そのプログラムのうち、1日目の記念講演と2日目のシンポジウムが当センターとの共催のもとで実施されました。

今回の大会の記念講演とシンポジウムの共通テーマとして「ラテンアメリカのゼロ年代」を設定し、この10年の主要なトレンドを振り返り、今後のラテンアメリカにどのよ



講演には国内のラテンアメリカ研究者を中心に118名が参加

うな影響があるのか、検討しました。その口火を切っていただいたのが、記念講演の講師、ロンドン大学名誉教授で元英国王立国際問題研究所所長のビクター・バルマートーマス氏です。

“Out of the Shadow?: The Maturing of Latin America in the 21<sup>st</sup> Century”と題する講演では、21世紀初めの10年間、ラテンアメリカは欧米、特にアメリカ合衆国に対する相対的地位を向上させ、世界における存在感を増してきたとして、国際関係、経済、政治、社会、環境問題などの観点からその変化を分析しました。プラスの変化は一様ではなく、一部の地域では治安の悪化、政治腐敗、環境破壊等の問題が深刻化しているものの、総体としては「2歩前進、1歩後退」と特徴づけられる、として、慎重ながら楽観的な見方を披露しました。

会場からは、講演者が楽観視した国際関係ほかの各観点について、より悲観的な状況が観察されるのではないかと問題提起がなされました。翌日のシンポジウムでも、ラテンアメリカ各国のみならず諸国間でも格差が拡大する懸念がより支配的でした。

(文責：村上勇介)

## 「中東欧とラテンアメリカのいまを比較する」第5回研究会

日程：2010年7月24日(土) 会場：京都大学東京オフィス会議室1

本研究会は、地域研の複合共同研究ユニット「新自由主義の浸透と社会への影響に関する地域間比較研究」の一環として、その下にある二つの個別共同研究ユニット、「中東欧・ロシアにおける新自由主義的政策の展開とその帰結」と「ラテンアメリカにおける新自由主義の浸透と政治変動」が協力し実施している活動です。前年度までの複合共同研究ユニット「『民主化』と体制転換の地域間比較研究」のなかで進めていた中東欧とラテンアメリカの地域間比較研究の試みを継承したもので、7月24日(土)に京都大学東京オフィス会議室1で実施した今回の研究会で5回目を数えます。

今回は、小森宏美(京都大学)「新自由主義的政策を支えるエストニアの連立内閣と『社会正義』理解」、浦部浩之(獨協大学)「チリの『右傾化』とパラグアイの『左傾化』は新自由主義の是非の選択と関係しているのか」という二つの報告から、新自由主義と社会や政治のあり方との関係について考察しました。

小森報告は、中東欧のなかでも格差が大きく拡大しているエストニアで新自由主義的な政策がとられてきた原因を、ロシア語系住民の政治からの排除を背景とする左派政党の欠如に求める従来の見方にくわえ、新自由主義化を進めた歴代連立政権の要となった改革党の存在や、経済が順調だったなかで格差の縮小は望むものの個人の努力は評価すべきという社会正義感に求めることを重視しました。

他方、浦部報告は、ほぼ同時期に民政移管したチリとパラグアイは、その後、一つの勢力が権力の座についてきたことで共通しており、その勢力が各々の内部対立から至近の選挙前に分裂する事態となり、それが結局は政権交代につながったのであって、新自由主義路線との関連で近年のラテンアメリカ政治の動向を捉える風潮に一石を投じるものでした。いずれも、政治過程を新自由主義をめぐる議論に還元できない位相が存在することを確認する報告で、今後、考察を深化させる際の事例の選択に重要な指針を与えるものでした。

(文責：村上勇介)

# 研究会開催のお知らせ

## 中東地域における 経済自由化と統治 メカニズムの頑健性 に関する比較研究 第2回研究会

日時：2010年11月13日(土)  
14:00~18:00

会場：京都大学東京オフィス会議室3  
(<http://www.kyoto-u.ac.jp/ja/tokyo-office/about/access.htm>)

### 研究会の趣旨

本研究ユニットでは、原油価格の変動などを背景として政治と経済が交錯する中東諸国の状況、およびそれが社会にもたらした影響について検討し、中東諸国家の制度的頑健性について、理論的かつ個別事例の分析を進めることを課題として研究会を開催しています。

第2回研究会では、湾岸協力会議(GCC)に所属する中東・アラビア湾岸地域諸国における企業の海外展開の実態、および湾岸アラブ諸国において「国民」とはどういう意味を持つのか、二つの事例報告に基づいて考察します。

### 報告者および報告タイトル

報告①「GCC企業の海外展開(仮)」  
齋藤純(日本貿易振興機構アジア経済研究所)

報告②「湾岸アラブ諸国の『国民』(仮)」  
松尾昌樹(宇都宮大学)

※会場準備がございますので、参加を希望される方は11月1日(月)までに浜中・松田宛にご出席をお知らせください。

### 問い合わせ・連絡先

○浜中新吾(山形大学地域教育文化学部)  
oshiro@e.yamagata-u.ac.jp

○松田浩子(共同利用・プロジェクト構  
想委員会事務担当)

hirokom@cias.kyoto-u.ac.jp

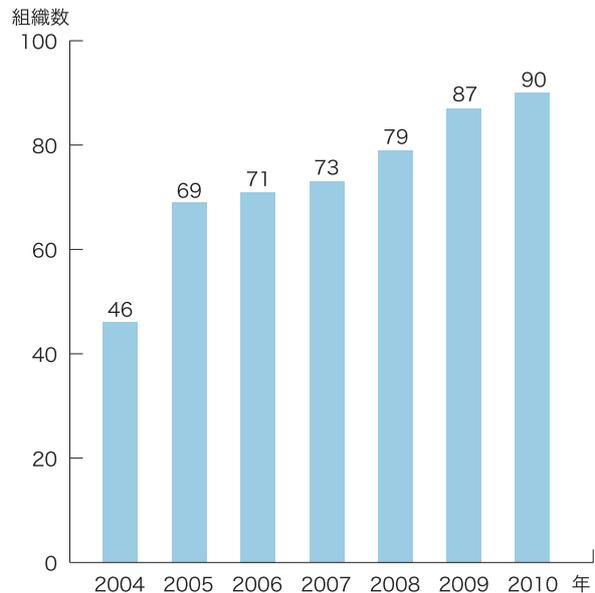
## 地域研究コンソーシアムの活動

地域研究コンソーシアム(JCAS)は、去る4月で発足から7年目に入りました。加盟組織は今年の7月31日現在で90に達しました。

5月に開催された運営委員会で、今年度の活動方針が承認されました。その内容は、メルマガの発行やホームページを通じた広報、雑誌『地域研究』の発行、年次集会の実施、大学院教育・次世代育成を目的としたワークショップの開催、情報資源共有化、地域情報学、社会連携、地域研究方法論の各研究会の実施など、昨年度までと同様の活動に比べ、共同企画研究、共同企画講座、出前形式によるセミナー、学会連携シンポジウムといった事業を新たに実施することです。加盟組織ならびに地域研究者の皆様から一層のご協力をいただきますようお願い申し上げます。

このうち、「次世代ワークショップ募集」は6月末日に締め切り、2件が採択されました。9月15日まで追加募集を行っています。「次世代ワークショップ」に採択された課題のプログラムは、JCASのホームページ(<http://www.jcas.jp>)の「地域研究イベント情報」欄に順次掲載いたします。

今年度の年次集会は、11月6日(土)に上智大学中央図書館9階大会議室(L-991号)において開催します。具体的な



加盟組織数の推移

※年度終了時点の数字ではなく、記録に基づいて年度なかばの数を抽出。  
COEプログラムの終了などにもなって組織数が減少した月もある

プログラム(年次集会と公開シンポジウム)については、上記のJCASのホームページでお知らせいたします。(文責:村上勇介)

## 越境するカリスマ僧コーケー師

小島敬裕

こじま・たかひろ……京都大学地域研究統合情報センター研究員。専門はミャンマー、中国雲南省徳宏州の上座仏教徒社会に関する地域研究

筆者が初めてコーケー師に出会ったのは、2004年のことである。当時、筆者はミャンマーにおける上座仏教と国家のかかわりについて研究しており、1980年の全教派合同会議後に非公認とされた地方サンガの仏教実践がひとつの主要なテーマだった。なかでも中国、ミャンマー国境付近に存在するポイズン派の実践に関心をもち、シャン州のムセ郡、ナンカン郡を探し回った末にようやくたどり着いたのが、ムセの街中から車で30分ほど離れた山中に佇むコーケー村の寺院であった。

住職のコーケー師（僧名カッティヤ師）が止住する建物に入ると、多くの人々が列をなして師の登場を待っている。寺院の壁に掛けられた長刀や、しばらくして現れたコーケー師の身体が不自由であることに、筆者は目をひかれる。

上座仏教では戒律で殺生を禁じており、また出家者には五体満足であることを義務づけているため、仏教徒社会の他地域ではこのような例を見かけたことがなかったからだ。「診療」が始まると、コーケー師は偈頌を誦えながら患者の身体にマジックで印をつけていく。こうすれば医者にも治せない病気が治るのだという。現在では仏教の制度化が進み、僧侶による治療行為が禁止されたミャンマーにおいて、このような実践を目にするのは筆者にとって初めての経験であった。しかし当時は、山中の寺院における、サンガ機構の管理を逃れた例外的な現象に過ぎないと考えていた。

その予想が覆ったのは、2005年から2007年にかけて、中国雲南省徳宏タイ族ジンポー族自治州の瑞麗市で長期定着調査を行ってからである。瑞麗市は、トゥンマーウと呼ばれる盆地の中国側の地域であり、ミャンマー側のムセ郡、ナンカン郡に面している。そのため僧侶の移動も短期間であれば比較的自由で、中国側で開催される儀礼にもミャンマー側の僧侶がしばしば参加する。調査を始めると、大規模な儀礼の際には、ポイズン派の最長老としてコーケー師がミャンマー側から必ず招かれることがわかってきた。ポ

イズン派はミャンマー側ではサンガ機構によって「異端」とされたが、中国側の徳宏ではむしろ多数を占めており、コーケー師は大きな影響力を持っていたのである。



コーケー師

コーケー師は1951年、広東出身の漢族の父と芒市出身のタイ族の母の間に生まれた。父は国民党の軍人で、芒市の村に駐在して漢語教師を務めていた際に、妻と知り合い結婚した。間もなく共産党軍が徳宏へ進駐したため、両親はムセに移住し、師はそこで生まれた。その後、父親はさらに台湾へ逃亡し、母親も後に再婚したため、師は10歳の時に見習僧として芒市の寺に預けられる。しかし1966年からの文革の時代には、中国側の寺院に止住できなくなり、ミャンマー側のコーケー寺に移住する。コーケー寺の前住職から占いの術を習い、さらに21歳から5年間、山中の洞窟で瞑想修行したことによって、徐々に有名になったという。

コーケー師が中国側を訪れる際には、儀礼の合間の時間を狙って在家信者が押しかける。コーケー師は漢語に長けていることもあり、信者はタイ族のみならず、漢族も多い。彼らのおもな目的は、占いや病気の治療である。また師が偈頌を誦えて吹き込んだ聖水や糸、護符を記した赤い布を授かる。これらは悪霊祓いに効果があるとされている。

また中国側の村落全体でコーケー師を招き、悪霊を除祓することもある。中国側では特に文革後、僧侶が止住しない寺院が増加し、筆者の調査村でも文革後は僧侶を置いていない。調査村に師が招かれたのは、村の中で夫が妻を殺害し、夫も自殺するという事件が発生した後、村人や家畜が相次いで死んだときのことであった。村人たちは死んだ夫婦の悪霊の仕業と考え、村にコーケー師を招いた。師が2人の墓場で羯磨文を誦えると、それ以降、村に死人は出なくなったという。

タイ、ミャンマー、中国の3国を跨いでカリスマ的な人気を誇る僧侶としては、現在、北タイに止住するウンズム師（タイ語ではブンチュム師）が有名であり、瑞麗でも寺院や家庭の仏壇でウンズム師の写真をしばしば見かける。コーケー師はウンズム師ほど広くは知られていないものの、国家や民族の境界を越えて信仰を集める点において共通している。近代国家の成立にともない、東南アジアの仏教徒諸国においては仏教の制度化が進んだが、その一方で特に国家の周縁部においては、制度化された仏教と異なる、地域に根ざした独自の実践が受け継がれているのである。

コーケー師が記した護符には、徳宏タイ文字、漢字、ビルマ文字の3種類が使用されている。玄関の上に貼って、悪霊を除祓する



## 国外客員研究員

2010年4月1日～6月30日まで在任した国外客員研究員を紹介します。

### Danny Wong Tze Ken



My name is Danny Wong Tze Ken, I am a Professor of History at the University of Malaya in Kuala Lumpur, Malaysia. I was Visiting Research Fellow at the Center for Integrated Area Studies (CIAS), Kyoto University from 1 April to 30 June 2010. My research project in CIAS was on the History of Sabah from 1945 to 1963, looking into the changes that took place in Sabah (known at that time as North Borneo) during the last phase of British colonialism. Associate Professor Hiroyuki Yamamoto was my research counterpart. I really enjoyed my stay at CIAS, the staff were extremely helpful, and together with the academic colleagues, did their very best to make me feel at home. I found the research conducted by the CIAS researchers most interesting and

refreshing, combining skills that cut across disciplines in researching on very tangible issues pertaining to different areas. I also benefited from the very rich collections at the center's library. The microfilms and digital sources were extremely useful for my research. During my spare time, I had the opportunity to visit some of the most attractive places in beautiful historical Kyoto. The temple of Kiyomizu-dera was my favourite. My only regret is that my stay was far too short. I hope that my visit will mark the beginning of further research collaboration in the future.

マレーシア・サバ州の歴史研究に関する研究会(2010年6月25日)



## 出版物の紹介

地域研が刊行した出版物と、地域研スタッフが執筆・編集した出版物を紹介します。

CIAS Discussion Paper Series No. 13

『『カラム』の時代——マレー・イスラム世界の「近代」』



山本博之編著 2010年3月刊  
A4判、46ページ

1950年から1969年までシンガポールで発行されたマレー語月刊誌『カラム』(Qalam)について、掲載記事をテーマごとに紹介する研究ノートをもとめた論集。2009年度の地域研萌芽研究「マレー語雑誌『カラム』データベースを利用した研究」の成果の一部。山本博之、坪井祐司、國谷徹、金子奈央、光成歩の各氏による論考を所収。

CIAS Discussion Paper Series No. 14

*Des expériences transfrontalières à la formation d'une Communauté Economique en Asie: le rôle des investissements directs extérieurs japonais*



Anne Androuais著 2010年3月刊  
A4判、48ページ

ASEANなどの地域組織や日本の海外への直接投資に共通する政治・経済活動における「越境の経験」の論理を明らかにし、将来の東アジア経済共同体の構築をみすえ、日本が経済や環境の分野でアジア諸国との持続可能な関係をいかに構築するかを論ずる。

※ Discussion Paper 『『カラム』の時代——マレー・イスラム世界の「近代」』、*Des expériences transfrontalières à la formation d'une Communauté Economique en Asie: le rôle des investissements directs extérieurs japonais*、『インドネシアにおける土地権と紛争』、*Disparities in the globalized world: reality, perception and movements*の冊子版をご希望の方は [ciaspublish@cias.kyoto-u.ac.jp](mailto:ciaspublish@cias.kyoto-u.ac.jp) に、『地域研究』、『満洲国のビジュアル・メディア——ポスター・絵はがき・切手』の購入をご希望の方は発行者・発売者にお問い合わせください。

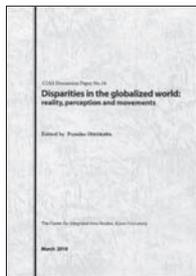
『インドネシアにおける土地権と紛争』



中島成久 編 2010年3月刊  
A 4判、162ページ

共同研究「アジア太平洋におけるリジョナリズムとアイデンティティの現在——地域社会、国家、地域間協力の歴史的／社会文化論的研究」、「土地権、環境、暴力——インドネシアにおけるアブラヤシ開発をめぐる諸問題」の研究成果のうち、とくにインドネシアの土地権と紛争に関する研究の成果をまとめたもの。John McCarthy、Oetami Dewi、Anton Lucas、Afrizal、中島成久、ノルマン・ジワン、アンディコの各氏による論考を所収。

*Disparities in the globalized world: reality, perception and movements*



押川文字編 2010年3月刊  
A 4判、110ページ

地域研が主催した国際シンポジウム「International Symposium on Linkage of Disparities: Reorganization of Power and Opportunities in the Globalized World」(2010年2月15日～16日)での発表内容をまとめた論集。シンポジウムでの報告のうち、政治意識、人口移動および教育における変化に焦点をあてた平野浩、間寧、高橋百合子、岡本正明、Rasma Karklins、小林ハッサル柔子、石井正子、Li Fangの各氏による論考を所収。

『地域研究』Vol.10 No.2



地域研究コンソーシアム (JCAS)  
『地域研究』編集委員会編  
2010年3月刊 A 5判、293ページ  
価格：2,520円(税込) 発売：昭和堂  
ISBN：978-4-812210-13-0

「特集1 社会主義における政治と学知——普遍的イデオロギーと社会主義体制の地域化」として、青島陽子、青山弘之、亀山郁夫、古田元夫、田原史起、家田修の各氏による座談会と、金山浩司、立石洋子、池田嘉郎、地田徹朗の各氏による論考を所収。「特集2 南アジアの手工芸と開発——日本と南アジア生産者の関わりを研究者と実践者の『対話』を通して考える」として、金谷美和、中谷純江、松村恵里、上羽陽子、五十嵐理奈の各氏による論考を所収。

『満洲国のビジュアル・メディア——ポスター・絵はがき・切手』



貴志俊彦著 2010年5月刊  
A 5判、248ページ 定価2,800円(税別)  
吉川弘文館刊 ISBN：978-4642080361

幻想の王道楽土「満洲国」は、いかに自らの存在を国の内外へ認知させようとしたのか。そのメディア戦略の全貌を、記念行事や祝祭用のポスター、絵はがき、切手など、106点に及ぶ豊富な図版で検証。新たな満洲国のイメージを描く。目次：プロローグ…満洲国のメディア戦略と弘報／「大富源」と「観光満洲」のはざまで／「建国」と「承認」をめぐるメディア・イベント／「建国一周年」をめぐる攻防／帝政への転換と日満関係／日中戦争と弘報一元化／国防体制の強化と「健康満洲」／決戦体制下における弘報独占主義／建国10年の「成果」と「課題」／エピローグ…人々は満洲メディアをどう見たか

『地域研究』では投稿原稿を募集しています

和文雑誌『地域研究』は、地域研究コンソーシアムに編集委員会をおき、地域研究に携わる研究者はもとより、隣接分野・異分野の領域に関わる方々に広く開かれた年2回刊行の雑誌です。刊行は地域研が担当し、制作を担当する昭和堂から市販しています。本誌は、特集企画と個別論文によって構成されており、どちらも随時募集しています。

グローバル化の進む今日、世界の各地は緊密に連関し、また共通の課題に直面しています。その変化や課題が展開されているのは、人々の生きる現場である「地域」でしょう。『地域研究』は、地域の総体的理解を目指

す地域研究のフォーラム誌として、世界各地を対象とする多様な研究を結び、地域の視点から問題を提起し、「地域から世界を考える」ことを目標としています。地域から世界を、また世界から地域を見つめる投稿論文をお待ちしております。なお、応募された論文は査読の上、掲載を決定します。

執筆要領の詳細は、地域研究コンソーシアムのホームページに掲載しております (<http://www.jcas.jp/>) ので、ご覧ください。バックナンバーは地域研ホームページでご覧いただけます ([http://www.cias.kyoto-u.ac.jp/alpub2/jcas\\_review/](http://www.cias.kyoto-u.ac.jp/alpub2/jcas_review/))。 『地域研究』刊行担当

## 地域研の動き

### 新センター長が就任

1ページに関連記事

林行夫教授が、2010年4月に、新センター長に就任しました。

2006年の設立以来、地域研は共同研究を推進する施設として、研究分野と地域を横断する研究活動を促進するとともに、情報学の手法を地域研究に応用して地域に関する情報の共有化、そして「地域情報学」の構築を目指しています。

林センター長の下、本年度から地域研は「共同利用・共同研究拠点」となり、また「地域情報学プロジェクト」も開始されました。新体制の地域研に対するご支援をよろしくお願いいたします。

### 貴志俊彦教授が着任

5ページに関連記事

貴志俊彦教授が、2010年4月に、地域研地域情報学部門の教員として着任しました。

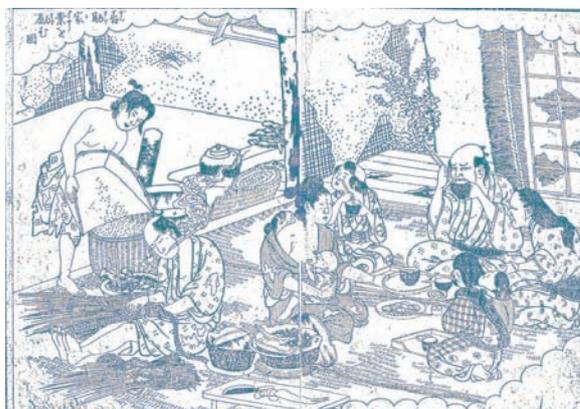
貴志教授は、文字資料と非文字資料という二つの研究メディアから東アジアを中核とした地域間の結びつきを考察するとともに、地域研究に役立つ情報を日本から世界へ発信することを重視し、東アジア地域に関する史資料情報の共有化を試みています。

貴志教授が加わったことにより、地域に関する情報の共有化、そして地域情報学の構築を目指す拠点としての地域研の機能がさらに強化されました。

### 地域情報学プロジェクトが発足

平成22年度から5か年計画で、地域情報学プロジェクトが始まりました。地域研がこれまで進めてきた情報資源共有化システムをベースに、本プロジェクトでは、地域研究の直接的な成果につながるような分野・地域横断的なデータベース(統合型地域研究データベース)システムを構築し、汎用的なかたちで提供することをめざすものです。地域研究と情報学を融合させた地域情報学の具体的な成果となることを期待しています。

## 最後の一枚



会津藩医であった石田竜玄が、嘉永7(1854)年に著した『万民心の鏡 善・悪』の「善助家業を励む図」を画像処理してみました。幕末期の農家の様子が目に浮かびます。

開国間もない頃、demographyには民勢学の訳語が当てられ、行政や軍事など国勢に関わるstatistics、政表と対をなしていました。demographyは、民衆の生活状態を表す用語として日本に受容されました。近代移行期に生きた人々の暮らしを彷彿とさせるhistorical demographyを描くにはどうすればよいかと考えながら、フィールドワークと時空間情報処理を視野におさめた地域研で、「江戸時代における人口分析システム(DANJURO)」〈<http://kawaguchi.tezukayama-u.ac.jp>〉の拡充に努めています。 (文・写真:川口洋)

京都大学地域研究統合情報センター  
ニュースレター No.7

●発行日 2010年9月29日

●発行者  
京都大学地域研究統合情報センター  
〒606-8501  
京都市左京区吉田下阿達町46  
Tel : 075-753-9603  
Fax : 075-753-9602  
<http://www.cias.kyoto-u.ac.jp/>

●編集責任 星川圭介

●編集協力・表紙デザイン 川島淳子